

〈特集Ⅰ〉シンポジウム

地域世界論の新地平

特集にあたって

小谷 汪之

歴史学において、地域や地域世界という概念が提唱されてからもうかなりの年月がたつ。上原専祿は一九六四年歴史教育者協議会大会における講演「歴史研究の思想と実践」で、それぞれに固有の課題を抱えこんだ「地域世界」という概念を設定し、世界史をこれらの諸「地域世界」から構成されるものとして捉える方法を提起した。そして、そのような「地域世界」として、具体的には「イスラームの世界」、「サハラ以南のアフリカ」など一三の「地域世界」を設定した（『歴史地理教育』一〇二号）。社会や国家の歴史を世界史に結びつける媒介環として「地域世界」を設定するという上原の提唱はその後の世界史教育に大きな影響を与えた。

他方、歴史学研究会一九六三年大会総合部会では、「東アジアの歴史像の検討」というテーマを掲げて、遠山茂樹、堀敏一が報告した。これは、日本の歴史を「東アジア歴史世界」の中に位置づけて理解しようとする試みで、夜郎自大的な日本史一國主義に対する有効な批判となった（遠山「東アジアの歴史像の検討―近現代史の立場から」、堀「近代以前の東アジア世界」とともに『歴史学研究』二八一号）。

このような地域世界論に大きな転換をもたらしたのは一九七三年歴史学研究会大会における板垣雄三の報告「歴史に

における民族と民族主義」であった（『歴史学研究 別冊 一九七三年歴史学研究会大会報告』。後に板垣『歴史の現在と地域学』岩波書店、一九九二年に再録）。それまでの地域世界論が、主として、一国あるいは一社会を越えた広域的まとまりを想定して、それをいわば実体として捉えようとする傾向が強かったのに対して、この報告で板垣が提起した「n地域」論では地域を最小は一人の人間から最大は地球全体というように可変的なものとし、そして、そのようなものとしての地域はある実体として存在するのではなく、主体的に設定されるものであるとした。こうして、地域、地域世界を設定しようとする者は自らの主体性を問われることになったのである。

本シンポジウムにおける諸報告も地域、地域世界をめぐるこのような問題状況に規定されて、さまざまな地域を設定している。そこには、東アジア世界という遠山以来の地域設定もあれば、パレスチナのように地理的地域というよりは解放運動の場としての地域というべき地域もある。これらの諸報告を通して、地域、地域世界を多元的に論じることができればと思う。